

<<ワークショップ>> (9月3日 15:55-18:25)  
【8号館4階843教室】

日本の外から見た日本  
—談話研究の視点—

佐藤 彰, 岡田 悠佑, 韓 娥凜, Oyunaa Nomin, 秦 かおり, 岡本 能里子

日本ではここ数年, 外国人が日本文化／日本人を賞賛するバラエティ番組がテレビの高視聴率時間帯を席卷している。それはまるで, 十数年前に外国人が日本文化／日本人を批判するバラエティ番組が好評を博したことを疑わせるほどの勢いである。これに対し, 日本が現在おかれた政治的・経済的状況の反映であると社会学的／ジャーナリスティックに考察したり, また伝統的な人気ジャンルの一つである「日本文化論／日本人論」のバリエーションとして批評を加えたりすることも可能だろう。このように昨今の現象に関する様々なアプローチがある中で, 本ワークショップでは, 日本の外から見た日本の姿を, 談話研究のレンズを通して明らかにすることを目的とする。具体的には,

- (1) 会話分析, 批判的談話分析, ナラティブ分析といった異なるアプローチを用いて,
- (2) 少人数インタビューや政治演説, 公聴会などの対面でのやりとりから, 新聞報道やインターネット番組などのメディアを介したコミュニケーションまでを対象に,
- (3) 米国, モンゴル, 韓国, 英国など, 日本の外から日本を眺めた際, 何が見えてくるのかを検証する。

これらの分析は, 「日本の外から見た日本の姿」と, 『日本の外から見た日本の姿』であると日本で報道・認識されている姿には隔たりがあり, またその隔たりは解釈・文脈依存型のディスコース生成によって生じることを解明するものである。

<<ワークショップ>> (9月3日 15:55-18:25)  
【8号館4階844教室】

理論研究再考  
—理論・モデルは社会言語科学にどう貢献するか?—

吉川 正人, 岡本 雅史, 木本 幸憲, 佐治 伸郎

本ワークショップは、様々なフィールドで活躍する研究者の研究事例紹介を通じて、社会言語科学会における「理論研究」の意義を再考し、記述研究の整理・統合、及び新たな事実発見のための枠組みとしての理論の重要性を示すことで、理論研究をこれまで以上に奨励することを目的とする。

近年、本学会における研究発表は、会話分析をはじめとする記述的研究の報告が、少なくとも数の上では趨勢を誇っており、記述の枠組みそのものを議論するような研究や、記述の結果を一般化し説明理論を与えるような、所謂「理論研究」と呼べる研究発表は寡少であると言っていい。このこと自体は別段問題視されるようなことではなく、むしろ健全な記述研究の蓄積が進むことは極めて有意義なことであるが、その一方で、このいわば「記述指向性」が今後も継続され続けると、以下の2点の問題が浮上する恐れがある:

1. 記述の枠組みの正当性を顧みる機会が損なわれ、記述自体の妥当性が検証できなくなる
2. 個々の記述が蓄積される一歩でその整理・統合が進まない(「記述のガラパゴス化」)

本ワークショップは、このような問題意識から、種々の研究フィールドにおける理論の重要性を再確認し、理論研究の重要性を提示することによって、1, 2 の問題を未然に防ぐことを目的とする。

<<ワークショップ>> (9月3日 15:55-18:25)  
【8号館5階852教室】

インターアクションにおける不調和を再考する

山口 征孝, 荻原 まき, 野澤 俊介, 浅井 優一, 武黒 麻紀子

本ワークショップでは、インターアクションにおける不調和(期待/想定されることと現実との間の違和感, 齟齬, 対立, 争い)を取り上げる。台湾でのインタビュー, 豪州におけるゴシップ, オンライン・コミュニティにおける「荒らし」, フィジー島での首長選定の言語データをもとに, 異ジャンルで不調和が生起するプロセスを詳細な談話分析により明示化する。インターアクションの「今・ここ」の分析に社会文化的, 歴史的状況の考察を加えながら, 発話出来事内部の不調和だけでなく, 不調和がいかに現代社会を特徴づけるメタ語用的談話を誘発するのか, 不調和の解消あるいは調和に向けた言語的・語用論的・社会文化的方策を見つけ出すことができるのか, といった点を検討する。

各研究発表により, 不調和は相互行為の「今・ここ」で個々の参加者が持つ違和感や齟齬である場合もあるけれども, 文化的, 歴史的な軸を通して見ると, メタ語用的談話を形作り, 積もり積もった対立やより深刻な争いの引き金にもなりうる事が分かる。表立って現れない不調和が個人の中で収束したり, 表面化した場合でも解消や軽減に向けた取り組みがみられる一方で, 言語使用を通じて作られ, 繰り返されていく不調和が, イデオロギー的特徴を持って現代の社会文化的実践を統制してしまう可能性も提示される。不調和の先に何を見て, それとどう向き合うのか, 本ワークショップの意図はこうした問題提起にある。

<<ワークショップ>> (9月4日 14:10-16:40)

【8号館4階843教室】

国際移動する日本語使用者の言語実践とアイデンティティ

三宅 和子, 川上 郁雄, 岩崎 典子, 平高 文也

本ワークショップは、国際移動する「日本語使用者」の多様な言語実践を俯瞰的な視点で関連づけ、人と物が移動し交差・融合する現代社会における「ことば」の役割を考える。

グローバル化時代には、国籍、言語、文化、伝統などの境界が崩壊し、越境や融合がみられる。欧州に広がる複言語・複文化主義の考え方と実践、言語を動的に捉えるTranslanguagingの萌芽にみるように、超多様な社会の言語行動現象を捉える視点と方法論が、日本でも希求される。本ワークショップは、従来様々なカテゴリー分けをされてきた、日本語学習者、定住外国人、日系ディアスポラ、継承語話者、駐在員と家族など、国際移動により日本語を含む複数の言語を使用するようになった人々を、グローバル化の世界を生きる「日本語使用者」として捉え直し、その多様な言語実践を明らかにすることにより、21世紀における「ことば」の役割と教育、そしてアイデンティティとの関連を追究する。具体的には①「移動する子ども」という生き方—移動とことばからアイデンティティを考える」、②「言語ポートレートにみる留学生のアイデンティティの変遷」、③「日系ディアスポラにおける「移動」の意味とアイデンティティ」、④「海外の非英語圏在住日本語母語話者の言語使用とアイデンティティ」の4つのテーマを掲げ、日本語、日本人概念を形作ってきた前提を超えた時間的・空間的動態性の視点から考察する。

<<ワークショップ>> (9月4日 14:10-16:40)  
【8号館4階844教室】

言語イデオロギー研究の射程と可能性  
—マイクロ・マクロをつなぐために—

木村 護郎(Christoph), 宮崎 あゆみ, 吉田 理加, 山下 里香, 寺沢 拓敬, 杉森 典子

言語イデオロギーの研究は、言語の構造や使用に関して使用者が持っている認知の仕方や価値判断といったメタ言語的な側面に注目し、ある程度継続的なメタ言語のパターンを社会的背景と関連づけて考察するアプローチとして提起されている(木村護郎Christoph「言語イデオロギー」『明解言語学辞典』三省堂, 2015)。日本の社会言語学的研究においては、実際の言語使用に関わるマイクロな側面と、社会的な背景に関するマクロな側面は、概ね別個に研究される観がある。異なる次元をつなぐことにこそ、社会的背景と実際の使用を関連づける、言語イデオロギー研究の大きな可能性が潜んでいると考えられるが、その射程と可能性がまとまって提示され、議論されることはこれまでなかった。本ワークショップは、マイクロとマクロの異なる次元に焦点をあてる研究を提示することで、マイクロとマクロの次元をつなぐ言語イデオロギー研究の可能性について議論を深めることを目的とする。

進行は以下の通りである:

1. 企画代表者による趣旨説明
2. A: マイクロなデータから出発してマクロにつなげる研究事例(話題提供1, 2)
3. B: マクロなデータから出発してマイクロにつなげる研究事例(話題提供3, 4)
4. C: マイクロとマクロの関連に焦点をあてた研究事例(話題提供5)
5. A, B, Cの3グループに分かれての質疑および議論
6. 全体での各グループの議論の共有と討論

<<ワークショップ>> (9月4日 14:10-16:40)

【8号館5階852教室】

英語教育・国語教育と論理的思考

—日英語比較, および過去30年間の国立大学入試問題分析からみる, 新指導要領への提言—

花崎 美紀, 吉川 厚, 小川 和, 大塚 崇史, 花崎 一夫, 北川 達夫, 多々良 直弘, 八木橋 宏勇, 菊池 聡

日本の教育界における喫緊の課題の一つに、論理的思考力を伸張させることがある。中学校・高校の学習指導要領は、それぞれ平成29、平成30年度以降に改訂される見通しであったが、平成28年度中での全面改訂に前倒しされ、平成32年度の完全実施が目指されている。その中で大きな骨子の一つも、論理的思考力をいかに伸ばすかになる予定である。

そこで本ワークショップは、論理的思考力を伸ばすために英語および国語の新指導要領にはどのようなカリキュラムが含まれるべきであるかを提言することを目的に、次の4部構成で行う予定である。まず第1部では、現行指導要領と新指導要領の案を比較し、どのような変更点が含まれる予定であるかを確認する。そして、第2部では、高校英語および国語の出口として厳然と存在する大学入試を分析し、中高における英語・国語教育において、どのような力を伸ばすことが大学から期待されているかを明らかにする。そして第3部では、日英語比較を行い、そのような論理表現が日本語および英語のどこに表れやすいのかを論じる。そして、最後に、第4部で、第3部までの議論をうけて、どのような論理的思考力を伸ばすことが期待されているかを明らかにしたうえで、どのようなカリキュラムが、英語および国語の新指導要領に含まれるべきであるかの提言を行いたい。